

特集

# 呼吸器診療の悩ましい「分かれ道」

## プロは何を選ぶか？

本特集「呼吸器診療の悩ましい『分かれ道』プロは何を選ぶか？」は、日々の診療で私たちが直面している、“どちらを選ぶべきか”という難しい場面に焦点を当てた企画です。呼吸器内科領域では、新たな診断技術や治療薬が次々と登場しており、その進歩は私たちにとって非常に心強い一方で、選択の複雑さも増しています。

ある疾患では旧来の治療法がすでに主流ではなくなっていたり、別の疾患では医師や施設によって治療方針が大きく異なったりと、「最適解が一つではない」状況が多く見受けられます。咯血に対して止血剤を使うか、血管塞栓術に進むか。喘息に対してどの吸入薬を選ぶか。COPDにおいてLAMA単剤で始めるべきか、triple therapyに踏み切るべきか。肺非結核性抗酸菌症でアミカシンリポソーム吸入懸濁液を導入すべきか。どの抗癌薬を選択するか。こうした悩みは、特に若手医師にとっては日常的に直面するものではないでしょうか。

今回の特集では、このような臨床現場のリアルな葛藤にお応えすべく、全国の第一線でご活躍されている呼吸器内科の専門家の方々に、ご自身が実際に経験された、あるいは臨床で頻繁に遭遇しうる“悩ましい分かれ道”を具体的に提示していただきました。そして、その複雑に分岐する道筋の中で、どのような思考プロセス



を経て最終的な判断をくださったのか。その選択に至った根拠は何か、あるいは、なぜあえて別の道を選ばなかったのか。教科書や論文からは決してうかがい知ることのできない、専門家の「思考の軌跡」とでも言うべき部分を、実感を込めて赤裸々に綴っていただいています。また、呼吸器を専門としない先生方や初期研修医、医学生の方にも本質をご理解いただけるよう、各疾患の基礎的な知識や最新のトピックスも随所に盛り込んでいただきました。

「この症例では、自分ならどうするだろうか?」と考えながら読み進めていただければ、本特集の各章が日々の診療における一助となるはずです。現場で選択に迷うことは、決して弱さではありません。迷いの中にこそ、診療の本質があると私は考えます。本特集は、明日の診療現場での“選択”を支えるヒントとなり、読者の皆さまの臨床力をさらに深める一冊となることでしょう。そして、この特集を通じて、呼吸器診療に携わる医療従事者の皆さまが、より自信を持って患者さんと向き合えるようになることを期待しています。読後に感じた“迷い”や“納得”を、ぜひ次の診療へとつなげていただければ幸いです。

国立病院機構近畿中央呼吸器センター臨床研究センター 倉原 優